

第70回日本食道学会 学術集会を終えて



第70回日本食道学会学術集会 会長
 宇田川 晴司
 (虎の門病院 副院長、消化器外科)

本年7月5日、6日、東京 芝の、ザ・プリンス パークタワー東京にて、第70回日本食道学会学術集会を開催いたしました。ご発表、ご講演をなさって戴いた方々、ご参加を賜った皆様に、心より感謝申し上げます。お蔭様で、発表演題712題、有料入場者数1253名を数え、大きな混乱なく何とか大役を果たすことができました。2つの国際シンポジウムに6名の海外招待演者をお迎えしたほかに、ワークショップに1名、International Esophageal Forumに8名の海外からの応募演題発表をいただき、その他にさらに14名の海外からの有料参加もいただきました。スライドの英語化にも皆様に快くご協力いただき、今後、アジアを中心に本学会を既定の参加予定学会と考えてくれる先生方が、増えてくるのではと期待しています。

学会のテーマを、「食道樂のすすめ～面白くてためになる食道学～from Information to Knowledge」とさせて頂いたのですが、今回の学会でその意をうまく伝えることができたかどうか、今も心配しております。ただ、各セッションで闘わされていた議論の数々は、正に私が期待していたようなものとなっていたと思っています。その分だけ、「臨床ばかりで基礎が足りない!」といった、まるで私そのものを指しているようなご批判もいただきましたが、これまでより多くの病理の先生方にもご参加をいただき、ポスターで発表された外科医からは、「発表をしてとても為になった。」という声も寄せていただきました。

この原稿を、シンガポールのISDEから帰ったばかりの熱の中で書いているのですが、日本食道学会は、まぎれもなく食道疾患を対象とする世界最大の団体です。会員数においても、食道という一臓器を中心にこんなに大勢の専門家が集う学会はありませんし、日本は食道疾患のどの分野においても世界一流の仕事をしており、特に食道癌の分野では、どの科も世界をリードする立場にいると思います。ではそれが正しく海外に向けてもアピールされているかというと、残念ながらまだまだそうとは言えません。そのうえに、手術にせよ、内視鏡にせよ、日本の優れた点・独創的な点を見抜いて素早くわがものとし、自分たちの得意な方法でどんどん世界にアピールしていこうという動きが世界中の随処に見られます。我々はその動きに臆することなく、我々の主張をもっと積極的に伝えていかなければなりませんし、食道学のより正しい方向への進歩のために、更なる主張を続けなければなりません。そして結果として、我々が他の国の方々から賞讃を受けるに値する存在であり続けることができれば嬉しい限りです。そのた

めにも、日本の食道学の中心である本学会の学術集会をますます充実したものにし、国際的なものにしていきたいと思います。ただこれは我々食道学会会員がまなじりを決めて行うべきことか、と言うとそうとは思えません。それこそ「食道樂」の気持ちで、楽しみながら進んでいきたいと思うのです。今回の学会でこれがどこまで実現できたかわかりませんが、これからの毎回の学術集会においても、会長の先生は是非この気持ちで頑張ってくださいたいし、参加される皆様も楽しみながら、今回にも増した寄与とご協力を続けていただきたいと思っています。

皆様誠にありがとうございました。

第70回日本食道学会学術集会 プログラムアンケートについて

プログラム検討委員会 担当理事・委員長

島田 英昭 (東邦大学 外科学講座 一般・消化器外科)

今年も学術集会終了直後に、評議員の方々にアンケートを実施しましたので(回答率25%)、その概要をご報告いたします。アンケートへのご協力に感謝申し上げます。

1.教育セミナーを学術集会前日に開催することについて:
 賛成63% 反対9% どちらでも良い28%

2.会場数は
 3会場が良い:64%、4会場でも良い:32%

3.参加セッションで評価の高かったもの3テーマ

(ア)ワークショップ5

「再発食道癌の治療、なおcureをめざすのは誤りか?」

(イ)ワークショップ4

「食道切除後再建法-より良い術後QOLをめざして」

(ウ)パネルディスカッション1

「胸腔鏡/縦隔鏡下食道切除術、

改めてその利点と欠点を問う」

4.今後希望するテーマ(自由記載):

内科系セッションの拡充の希望が多く寄せられました。具体的には、診断学、病理学、生理機能、GERD、好酸球性食道炎の診断、治療、食道アカラシアの治療ディベートなどのご提案がありました。また、セッションの内容が臨床のテーマのみとなっていることが多いので、基礎と臨床が共通のテーマでディスカッションできるような工夫が望ましいとのご意見もありました。他領域との関連では、食道、下咽頭癌、同時性重複癌の治療についてもご提案がありました。

内科系、基礎系の医師がより多く参加していただけるように、今後もプログラム検討委員会として、種々のご提案をしてみたいと思います。引き続き、会員の皆様からのご提案・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

各種委員会・部会報告

〔国際委員会〕

ISDE 2016のご報告

国際委員会 委員長

北川 雄光(慶應義塾大学医学部 外科)

2016年9月18日～21日The International Society of Diseases of the Esophagus (ISDE) 15th World Congressが米国Mayo Clinic Kenneth Wang会長のもとシンガポールにて開催されました。日本からも約300名の参加があり、全参加者は過去最高の800名超となりました。現在、日本食道学会はISDEのAssociated Societyとなっており、さまざまな学術的交流を行っています。今回はISDE-JESセッションとして「Updated Strategies for Management of Esophageal Squamous Cell Carcinoma」が企画され、本学会松原久裕理事長、欧州CROSS trialで著名なJan van Lanschot教授、Chinese Society of the Diseases of the Esophagus (CSDE)からWentao Fang教授の司会で日本の高度な食道扁平上皮癌診療(手術:宇田川晴司先生、内視鏡診断:小山恒男先生、集学的治療:武藤学先生、放射線治療:安田茂雄先生)が紹介され、会場は立ち見の聴衆も出るほどの盛況でした。日本が誇る世界最高の食道疾患診断、治療が改めて世界から高い評価を受ける素晴らしい機会となりました。また、European Society of the Diseases of the Esophagus (ESDE), Chinese Society of the Diseases of the Esophagus (CSDE)もそれぞれISDEとの合同セッションを開催し、まさに世界の食道疾患関連学術集会の集結が印象的でした。Galla Dinnerはシンガポール観光名所の一つフラワードームで行われ、各国の医師、研究者が地域と世代を越えて親睦を深めました。また、今回Vice Presidentを務めさせて頂いた私、北川雄光が次回ISDE 16th World Congressの会長を務めさせて頂くこととなりました。会期は2018年9月19日～22日で、オーストリアのウイーン大学を会場として開催されます。次回も学術的な内容をさらに充実させ日本からもより多くの皆様にご参加頂けるよう努力いたしますのでご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



〔食道外科専門医認定部会〕

平成30年(2018)年度から変わる食道外科専門医認定について

食道外科認定医認定部会 部会長

安田 卓司(近畿大学医学部 外科 上部消化管部門)

既にホームページでもお知らせいたしましたが、本年7月4日の理事会および評議員会にて、食道外科専門医試験への手術ビデオの導入が承認されました。会員の皆様への十分な周知徹底と準備期間を考慮して2年後の平成30年(2018)より運用を開始する予定で準備を進めているところです。この目的は食道外科専門医申請基準のハードルを更に高くすることではありません。本来、食道外科専門医は高難度手術である食道外科の安全性を担保するものであるにもかかわらず、手術技術の評価がなされていなかったという点を改善し、より信頼性の高い専門医資格とすることが目的です。したがって技術認定とは異なり、評価するのは食道手術を安全に行う技術と指導力で、危険行為の有無や手術の進行・展開の適格性、剥離層の正確性など、基本的な手術手技の習熟度を評価する予定です。現在、書類審査に加えた資格審査として行う方向で詳細を詰めているところです。それと同時に、試験の形式も口頭試問重視の方向に変更する予定です。これは、より多角的に食道外科に関する実臨床の実力を評価すること、財政面から費用の高む筆記試験を削減することが主たる目的です。現時点

では、担当分野の異なる複数のブースをまわって、画像の読影や診断能力、解剖の理解、最新の知見に関する知識や合併症に対する対応力等を口頭試問で評価する他、筆記問題形式の設問をその場で解答して縮小された客観的評価を補完すること等を検討しているところです。

ただ、これで申請のハードルが高くなったと感じて申請者数が減ったのでは逆効果で、外科専門医制度の3階部分の専門医として食道外科医の目標であり、かつ取得していることがstatusになるような魅力ある食道外科専門医にして専門医数を増加させていくことが最終目標です。そのため、申請基準の見直しも併せて検討中で、進捗状況は随時ホームページ上でお知らせしていく予定です。来年の評議員会までには具体的な概要は確定してご報告する予定ですので、どうぞご理解の程よろしく願いいたします。

〔食道癌取扱い規約委員会〕

食道癌取扱い規約第11版英語版について

食道癌取扱い規約委員会 委員長

梶山 美明(順天堂大学 上部消化管外科学)

前号のニュースレターでもご報告申し上げましたが、最新の食道癌取扱い規約(第11版)の食道癌取扱い規約委員会での英文化作業はすでに終了し、日本食道学会の英文機関紙である「Esophagus」誌に投稿されました。この第11版英語版は「Esophagus」誌の2017年第1号と第2号の2回に分けて掲載される予定です。またオープンアクセスの論文として電子出版されましたので、会員の皆様にはどしどし引用していただきIFの向上に寄与していただきたいと思います。ご協力よろしくお願い申し上げます。

ご承知のように2015年10月に食道癌取扱い規約が8年ぶりに改訂され、新たに第11版となりました。今回の日本語版の改訂では、日本食道学会の全国登録データを解析してすべてのリンパ節部位ごとに郭清効果を算出し、これを根拠としてリンパ節の群分類がエビデンスに基づいて変更されました。その結果、手術の内容に直結するようなリンパ節群分類の改訂や、進行度(stage)の改訂が行われ今後の臨床に与える影響が大きいと考えられます。

わが国から世界に向けて食道癌治療を発信していくうえでも食道癌取扱い規約第11版英語版の刊行は重要な意味があると思われれます。来年からは皆様が論文を執筆される際には「Esophagus」から食道癌取扱い規約第11版英語版をどしどし引用していただくようお願い申し上げます。

〔食道癌診療ガイドライン検討委員会〕

食道癌診療ガイドライン 第4版について

食道癌診療ガイドライン検討委員会 委員長

北川 雄光(慶應義塾大学医学部 外科)

2017年の食道癌診療ガイドライン改訂(第4版発刊)を目指して着々と作業を進めております。2016年2月10日にはClinical Question (CQ)推奨文に関する委員による同意率を無記名投票によって決定しました。2016年6月には食道癌診療ガイドライン改訂第4版のドラフトを日本食道学会ホームページ上で公開し、会員の皆様、また一般の皆様のご意見を頂いております。第70回日本食道学会学術集会(宇田川晴司会長)の会期中、2016年7月5日には、公聴会を開催し新ガイドライン変更点の概要が示されました。現在各関連学会によるレビュー、協力学会としての参画をお願いしております。

前版までは食道癌治療全体を俯瞰する一つの治療アルゴリズムが掲載されていましたが、本版からは臨床病期ごとに細かい治療アルゴリズムを作成しました。実地臨床において、何を指標にどう判断するかを臨床病期ごとに明確化し、アルゴリズムの分岐点となる判断に関連したCQを抽出しました。日常臨床において直面するCQと実際的なアルゴリズムの掲載が本版の特徴となっています。

ガイドライン作成に関する基本理念は、エビデンス至上主義からより実地医療に役立つ判断を取り入れる方向に変化しています。益と害のバランスを重視し、患者側の要望や医療経済的観点を含めて検討し、CQ推奨文に関して委員の無記名投票による同意率も掲載することとしました。

本ガイドラインの作成に携わった日本食道学会診療ガイドライン検討委員会委員、システムティックレビューチーム、関連学会でご協力を頂いた皆様が現時点でのベストを尽くしたこの第4版が日常診療、患者さんの食道癌診療への理解に少しでも役に立つことを願って作業を進めて参ります。

【ガイドライン評価委員会】

ガイドライン利用状況調査について

ガイドライン評価委員会 委員長

丹黒 章(徳島大学大学院 胸部・内分泌・腫瘍外科学)

食道癌診療ガイドライン【第4版】が来年4月に発刊予定ですが、本年10月に開催された第54回日本癌治療学会学術集会第3日目の10月22日のがん診療ガイドライン統括・連絡委員会主催シンポジウム「がん診療ガイドラインのアウトカムの検証」において、「食道癌診療ガイドラインが目指すもの 食道癌診断・治療ガイドラインアウトカムの検証」と題して発表させていただきました。アウトカムを検証すべく、食道癌診断・治療ガイドライン【第3版】の利用に関するアンケート調査を日本食道学会会員に行いました。本年の学術集会で公示し、8月の短期間に集めたアンケート調査であること、第4版の改定直前であることなどから、回答数は少なかったのですが、食道癌診療ガイドラインが広く活用されていることがわかりました。使用目的は診療方針の決定、インフォームドコンセント、知識の整理、文献情報などで、参考になった項目は外科治療、術前補助療法、化学放射線療法など治療選択に関するものでした。ガイドラインは臨床現場で有用であり、特に診療方針決定に有用であったとの回答でした。CQに関しても適切であるとの回答が多く、次期ガイドラインに期待するCQとして、術前栄養療法、術後治療、DCF療法、チーム医療に関するものがあげられていました。「しないことを弱く推奨する」などのCQの表現はわかりにくい、ネガティブデータも引用してほしいなどの意見が述べられていました。ご回答いただいた先生方に深謝いたします。

【研究推進委員会】

2017年度研究課題の公募について

研究推進委員会 委員長

藤 也寸志(九州がんセンター 消化管外科)

日本食道学会の研究推進委員会の活動として、＜2017年度の研究課題の公募＞を行います。この活動のイメージとしては、食道疾患の病態・診断・治療などに関する問題点や課題の解決を図るため、委員会主導さらに評議員からの公募によってプロジェクト研究を立ち上げ、Nation-wideな多施設共同研究やデータ収集・解析を行い、世界へ向けて情報発信することです。詳細は、本年末に評議員へのeメールおよび本学会ホームページでお知らせしますが、①全国規模での研究であること、②2年程度で結果が得られること、③1施設1課題の応募であること、④成果は機関誌Esophagusへ投稿することなどが規定されています。応募課題は研究推進委員会ならびに必要なに応じて倫理委員会が審査され、理事会で最終承認されます。

2015年度および2016年度に、それぞれ2課題・3課題が食道学会において承認されました。4課題は既に主任研究者施設の倫理委員会承認され、全国規模の研究が開始されています。残りの1課題も主任研究者の施設において倫理委員会などでの審査が行われている段階です。これらの研究課題は食道学会のホームページに掲載され、今後はその成果も順次公表していくことになっています。また、毎年学術集会において発表することも義務づけられています。

尚、『食道癌全国登録データを利用した研究のあり方』について、データ管理のあり方やデータ解析の信頼度などに関して全国登録委員会とも議論し、①データを申請者へ提供することは行わないこと、②データ解析は研究計画に基づいて食道学会が依頼した統計専門家によって行われ、結果を研究者へ提供することに決定しました。2017年度は、研究推進委員会がプロジェクトを1課題立ち上げて、この課程の検証を行います。そのため、食道癌全国登録データを利用した研究の公募は2018年度からになりますのでご留意下さい。

食道学会において活発なNation-wideな研究ができるように、会員の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成29年(2017年)

第71回日本食道学会学術集会について

第71回日本食道学会学術集会 会長

小山 恒男

(佐久医療センター 内視鏡内科)



第71回日本食道学会学術集会の会長を拝命した、佐久医療センター内視鏡内科の小山恒男です。2017年6月14日～16日に軽井沢プリンスホテルにて開催させていただきます。伝統ある、本学術集会を担当させて頂くことを名誉に思うと同時に、その重責を感じています。

会員の約80%が外科医である日本食道学会では、会則にて非外科系の会長は4年に1回とされています。第71回学術集会は久しぶりの非外科系会長であり、これをきっかけとして非外科系会員が増えるよう、趣向を凝らしたいと思えます。また、非外科系の参加者も充実した時間を過ごせるために、少なくとも1会場で非外科系の話題をとりあげます。

本学術集会のメインテーマを「進む勇気と退く沈勇」としました。食道疾患という難敵と戦うには、時に一步退き、体制を立て直す勇気が必要です。具体的には、高齢者食道癌にどこまで、どのような治療を行うべきか?地方において、数少ないスタッフで、どこまで手術を行うべきか?などなど。

新緑の軽井沢には魅力が一杯ありますが、学会期間中は勉強に集中できるよう、雨乞いを行いつつ皆様をお迎えいたします。どうぞ、よろしくお願いいたします。

2018年以降の学術集会のご案内

◆ 第72回日本食道学会学術集会

会長：加藤 広行（獨協医科大学 第一外科学教室）
会期：2018年6月27日（水）～ 29日（金）
会場：ホテル東日本宇都宮

◆ 第73回日本食道学会学術集会

会長：藤 也寸志（九州がんセンター 消化管外科）
会期：2019年6月（予定）
会場：福岡国際会議場（予定）



準会員募集のお知らせ

チーム医療を担う医療専門職の方々へ

日本食道学会 準会員募集

食道疾患の臨床では、看護師、薬剤師、リハビリテーション、管理栄養士、臨床検査技師、放射線技師、臨床工学技士、MSWをはじめとした医療専門職のみなさんが主体のチーム医療が不可欠です。

食道に関心を持つ多くの医療専門職の方々へ準会員になって頂き、質の高い研究成果を発表していただくことを期待しています。

入会金 無料 年会費 3,000円

日本食道学会準会員入会手続き
<http://www.esophagus.jp/associate.html>



準会員入会は
食道学会ホームページより

「平成28年熊本地震」被災地区在住 会員方の会費免除に関するお知らせ

会員各位

先の熊本県を中心とする地震により、被災された皆さまには、心からお見舞い申し上げます。

理事会におきまして、災害救助法適用地域在住の会員各位の平成28・29年度の会費を免除する旨を決議いたしました。詳細につきましては、会費免除ご希望の方は、お手数ながら該当地域に在住されていたことを確認できる書類（り災証明書・運転免許証・健康保険証等の写し）を添えて、年会費免除申請書とともに事務局まで郵送にてお申し出ください。年会費免除申請書は日本食道学会ホームページよりダウンロードしてください。
http://www.esophagus.jp/private/information/news_20160719.html

*編集後記

先日、食道癌取扱い規約第11版の英文化作業が終了し、Esophagusのオンライン版で公開されました。オープンアクセスですので世界中の臨床家、研究者に参照してもらえるものと考えています。会員の皆様にもぜひ一度ご覧いただければと思います。また、国内のみならず海外の論文への引用も期待できますので、Esophagus誌もこれまで以上に評価されることが期待されるとともに、発行母体の本学会の存在もますます重要になってくるものと考えられます。

つい先日まで暑い暑いと言っていたはずが、ふと気づくと紅葉の秋。このニュースレターが発行されるころには街はクリスマスのイルミネーションにあふれ、クリスマスソングが流れていることでしょう。月日の経つのは本当に早いと感じます。食道癌取扱い規約第12版が出版される頃には食道学の世界はいったいどのようになっているのでしょうか。今の常識が非常識になっているかもしれませんし、全く思いもよらなかった新しい治療法が出現しているかもしれません。会員の皆様とともに、日進月歩の食道学をますます盛り上げていければよいと思わずにはられません。

広報委員会 委員長 猶本良夫
委員 阿久津泰典、有馬美和子、出江洋介、熊谷洋一、竹内裕也、奈良智之、前原喜彦、白川靖博、山崎 誠、山辻知樹

特定非営利活動法人 日本食道学会 事務局

〒130-0012
東京都墨田区太平2-3-13 廣瀬ビルディング4階
電話・FAX 03-6456-1339
e-mail: office@esophagus.jp
ホームページ <http://www.esophagus.jp/>